



神様が恋をした



あなたの幸せが
永久に続きますように

佐川 凜

序章

木陰に、ひとつの祠がある。

所々にコケが生えている。一応水入れもあるのだが、中に入っている水は腐っていて、虫の死骸が浮いていたり 色が白くにごっていたりと、とても神様への供え物には見えない。

この祠は もう忘れ去られた祠。ここに住んでいる神様も、後は消えるのを待つのみだ。

昔は たくさんの人々がお菓子や 花や たまには酒を供えていた。町の小さなヒーローだった。 実際に、その頃は神様も強い力を持っていた。 雨を降らせたり、病気を和らげてあげたりした。ありがたがられた。 神様の黄金時代と言ってもいいだろう。

だが、それ以来はこの有様だ。 平然と前を通り過ぎ、車がやかましい音を上げながら泥を跳ね飛ばして走り去る。 供え物どころか、良く言えば味のあるオブジェになっていた。いや、オブジェなら まだ賞賛する人もいるだろう。

神様には、誰もいなかった。

そんな神様が、いつものように暇をもてあまして木の上で昼寝をしていた。 昼寝以外は、気の高いところに登って あたりの景色を楽しんだり、周辺に住んでいる住民の様子を見に行ったり。

今は春なので、桜を楽しめるし、人々も花見で楽しそうだ。 それでも、怪我をしたり病気が治らなかつたり、愛しい人を失って心に深い傷を負った人はたくさんいる。

供え物さえあれば。信仰の力さえあれば。 自分に力がありさえすれば、この人の病気や怪我を癒してあげられるのに。幸福を与えられるのに。

神様は、何もできずに 様子を見ることしかできない自分に嫌気がさしていた。

そこへ、1人の少女がやってきた。かわいらしい桜色のワンピースを着て、手にはタンポポを持っている。 髪は二つくりりにして、顔立ちもかわいらしかった。

神様は「なんだ、人間の子供か。 たかが子ども1人が、何をしようとしているんだろう？」と、小さな興味で少女の様子を木の上から こっそりと伺っていた。

少女は、手に持っているタンポポを祠の前に置くと、パンパンと手を二回打った。「神様、お供え物を持ってきました。 つまらないかもしれないけど、私の話を聞いてください」

そう切り出すと、少女は誰に話すでもなく1人で話し始めた。

学校のこと。 勉強のこと。 テストでいい点を取ったこと。 学校で飼っているウサギの世話当番が大変であること。 そして、友だちのこと。

「私、友達がうまくできなくて。 どうしたら、友達ができるのかな？」

神様はそれまで、何も言わずに黙って聞いていた。

正直、久々に人間の話聞いたので 楽しかった。 だが、力の無い神様にそんなことを相談されたところで、叶えてやれるものではない。

「そんなことを、私に言ってどうするの？」

神様は、初めて少女の前で独り言を言った。

すると 少女ははっと立ち上がり、きょろきょろと辺りを見回した。

どうしたんだろう、と神様が少女の様子を見てみると、少女と目が合った。 少女の目は、黒く澄んだ瞳をしていた。とても綺麗だった。

「あっ、神様！ やっぱり聞いていてくれたんですね！」

神様は驚いた。 芝居ではないだろうか、と思ったのでしばらくじっとしていたが、次第に少女が本当に自分を見ていると気づいた。

「君、僕が見えるの？」

「うん！見えるよ！ 誰にでも見えるんでしょ？」

少女は 平然と笑ってそういった。

これが、神様と少女の出会いだった。

少女は、名前を 山野 小春といった。

小春は毎日毎日、祠へ足を運んだ。手に、四季折々の花を持って。

四季折々と言っても、わざわざ買った花を持ってきたわけではなかった。そこらへんに生えている雑草ばかりだ。タンポポや、ツユクサや、犬鬼灯（いぬほおずき）などだ。

どれも大して珍しくは無いが、綺麗な花を持ってきてくれた。

「神様って、名前ないの？」

出会って数週間したときに、小春は神様にそうたずねた。

神様は教えようとしたが、思い出せなくなっていた。長年人と接せずに 名前も呼ばれることが無かったので、すっかり忘れてしまっていたのだ。

「名前、忘れちゃったの？」

「うん。全然思い出せないや」

あははは、と神様は笑って見せたが、内心はどうともいえない不安に襲われていた。自分が何なのか、思い出せない。人は、忙しかったりして誕生日をそのまま忘れてしまったりすることはあるが、名前を忘れることだけは無い。どんなに忙しくても、名前は毎日何かと使うからだ。

テストで名前を書く。書類にサインする。自己紹介するときも、まずは名前から言う人が多いだろう。

人は何かと 名前を大事にする。

「じゃあ、私がつけてあげる！」

急に小春が立ち上がって、そういった。

「名前が思い出せないなら、私が新しい名前 付けてあげる！」

小春は再びそういうと、う～ん、と声に出しながら考え始めた。

「そうだ！ 聞いたことがあるぐらいの名前なんだけど、刹那ってどう？」

刹那。

一瞬や瞬間などのきわめて短い時間をさす言葉。

「いいよ。小春ちゃんがそれがいいって言うなら、刹那でいい」

神様は静かにそういった。刹那は、正直くらいイメージの言葉だった。

短い時間。一瞬のとき。だからこそ、人は命を大切にしなければならないという教えである。

「じゃあ、神様はこれから 刹那ね！」

自分の案が認めてもらえたので、小春は笑顔を見せた。小さなえくぼがかわいい。

ああ。僕はようやく 本当に楽しい話し相手を見つけられた。

「刹那！」

それから、9年経った。

小春は小学校を卒業し、高校も卒業し、大学に通っている。そして、大学に行く途中で 刹那の祠に花を持ってたずねるのだ。

今は、出会った日と同じ、春。桜が咲き乱れ、祠の屋根にも何枚か桜の花びらが落ちている。

「ああ、小春ちゃんか」

刹那は 相変わらず木の上で昼寝をしている。

刹那の容姿は 人と全く変わらない。だが、服装は平安時代のような服装で、真っ白だ。冠はかぶっていない。その代わりに、洋風の結婚式のようにベールを後ろ向きにつけたように薄絹をつけている。動くたびに、ふわりと薄絹が浮き上がる。黒髪で、すっきりした髪形をしている。はっきりいって、かなりの美形だった。

「今日も暇そうね？」

祠の前に花を置きながら、小春は笑った。今日はナガミヒナゲシの花束だ。オレンジ色の花びらが、風にゆれた。

「そりゃあね。小春ちゃん以外、ここに来る日とないし」

木の上から、すたっと身軽に刹那が飛び降りた。薄絹が ふわりと舞い上がる。

「ごめん、今日急いでるから。帰ったら、話聞いて！」

そう言うと、小春はさっさと駆け出してしまった。

待って、と声をかけようとしては 戸惑う。言おうとして、一度も言えたことの無いこの思い。

好きだ。

さっさと言ってしまう。だが、言えない。拒絶されたときの悲しみを考えると、言葉が出ない。神様が人間ごときに恋をしたなんて 笑える話だ。

僕はいつになったら、このつかえたような想いを言葉にできるのだろうか。

「でね、その友だちがさすごいアドバイスくれて。おかげで、プレゼン大成功！」

祠の小さな石段に腰掛けながら、小春は大学での出来事を語る。刹那は、側に生えている木の枝に座って聞いている。

「そういえば、来週に私の誕生日なんだよ！刹那も、祝ってくれる？」

そうだ。

「小春ちゃん、今度何歳になるんだっけ？」

刹那はたずねた。

「私 来週で二十歳だよ」

・・・・・・・・・・。 刹那は、頭の中が真っ白になった。

「ああ・・・。 そうなんだ。おめでとう」

静かにそういった。

「もう遅いから、小春ちゃん帰りなよ。気をつけてね、危ない人にあっても 僕は守ってあげられないから」

「あ、うん。そうだね。 じゃあね、また明日！」

小春は立ち上がり、砂を掃ってから暗闇に走り去っていった。

来週には、小春が二十歳になる。

神が見えるものには、条件がある。

もともと 素質があること。そして、二十歳以下の子どもであること。

小春は二十歳を迎えると、刹那が見えなくなるのだ。精神に変化があったのではない。ただ昔に、人間と神の間に神話には記されていないことがあったのだ。

気が遠くなるほど昔に、 神が見えるから、仲間はずれにされたり、中には気味悪がられて殺された者がいた。

そして、神も同様に不幸な目に遭ってきた。 神を殺せば、殺したものが神の力を手に入れることができるという迷信が生まれたのだ。おかげで、神殺しが広まり 神の数が激減した。

なので、神と人間が契約した。

見える力は消せないの、二十歳になったら自然と神が見えなくなるように 神が世界を細工した。

その細工は、今まで変えられることは無かった。 思いの外、とても平和に人々も神も過ごせていたからだ。髪が見えないからと言って、人間の生活に支障が生じるわけではなかった。

だが、その細工のお陰でいま 小春との中が一生裂かれることになったのだ。

刹那は、何をしてでもどうにかしたいと思った。 小春が二十歳を超えても、自分が見えなくなるのが無いようにするために。

その日は一晩中寝ずに考えた。

呪い（まじない）を使うか？ いや、それは呪いをかけられた側に どんな反動が生じるか分からない。呪いは、それ相応の覚悟を持って挑まなくてはならない。

薬とか、医学の力で？ いや、刹那はそういう知識には明るくない。ここ周辺のことなら 誰よりも詳しいが、医学の知識はちっとも無い。

「どうすればいい・・・!？」

必死になって考えた。 小春に、神を見る目を失ってほしくない。 いつまでも、小春の目に映っていたい。

ただ毎日を退屈に過ごしていた刹那だったが、それからは毎日資料を集めたりすることに時間を費やした。 全ては、小春のために。

いや。違う。

自分のためだ。

「刹那ー？来たよ！」

小春が祠にやってきた。初夏なので、手に持っている花はツユクサだ。

「刹那？」

刹那の返事が無い。いつもなら、すぐになにかと返事をくれるのに。

いない。刹那がいない。

どこにもいない。木の上にも、草むらにも。

「刹那？」

小春が刹那を

結局、一週間過ぎてしまった。

小春には何もいえなかった。神が見えなくなることも、自分が小春のことを好きだということも。何も伝えられずに終わってしまった。

いい方法は見つからなかった。手当たり次第に書物を読んだが、これといったものは何一つ見つからなかった。何もできなかった。

情けなくて、悲しくて、悔しかった。

自然と涙が零れた。

もう、あの子の目に僕は映らない。悲しい。

小春はただ刹那の名を呼び、刹那は小春のために涙を流した。

運命とは、なんて残酷なんだろう。神はただ人を支え、人は神をあがめ、お互いに壁を作って時を過ごす。同じ場所で同じように接することはできない。

刹那にとって、こうやって接してくれるのは小春が初めてだった。

自分の事を見ることのできる人間はたくさんいたが、みんな神を敬い 奉り 崇めた。全員、一歩下がって話をするのだ。話し相手に不足は無かったが、刹那はいつも心のどこかに寂しさを抱えていた。

もういない。

これから、僕に花を届けてくれる人は 再び現れてくれるだろうか。

最低な神様

それから、さらに3年経った。

最初の一年は、小春は毎日祠にやってきた。そして、大学に出発しなければならないギリギリの時間まで祠の石段に座っていた。

春の桜が舞い降りる日も、夏の日差しの強い日も、秋の木の葉の散りゆく日も、冬の雪が降る日も。

毎日、同じ場所に座っていた。

そして 刹那も毎日その隣に立つか、座っていた。

最後には 二人で涙を流す。 会えなくて 寂しい。 声が聞けなくて。 声を聞かせられなくて。

寂しかった。

そして、3年がたった現在。

2年前から、小春は全く祠にこなくなった。初めて出会った日と、小春が刹那を見られなくなった日と同じような、桜の綺麗な日から ぱったりと来なくなってしまった。

最後に祠に置かれたタンポポの花はとっくに枯れはて、見る影も無かった。

きっと、自分のことなど忘れてしまったのだろう。

(小春ちゃんは人間だ。人間であるあの子を好きになったところから、大きな間違いだったんだ。神が人間に恋をしたところで、叶うわけがない。それぐらいのことは 僕にだって分かっていたはずだろう？)

もう忘れよう。小春ちゃんだって、きっと僕のことなんて忘れてしまったんだろう。僕はここ周辺を守る神として、ただ生きて ただ死ぬのを待とう……………)

「ここだよ」

そこに、聞きなれた懐かしい声が聞こえた。刹那は、すばやく身を起こした。

「私ね、二十歳こえるまで 毎日ここに来てたんだ」

小春だ。

しばらく見ないうちに、とても綺麗になっていた。背中が隠れるくらいまで長かった髪は、黒髪はキープしたまま背中の中ぐらまでの長さに切られていた。着ている服は、白い長袖のワンピースに優しいピンク色のカーディガンを羽織っていた。

「こは……………」

話しかけようとして、刹那の体が止まった。

小春の隣に、小春と同年ぐらいの男が立っていた。

二人は腕を組んでいる。男は目を疑うほど格好いいというわけではなかったが、優しそうな

目をしていた。背も高く、小春の目線が男の肩にきている。 服装も、白い長袖に青いチェックの半そでシャツを羽織っていて、普通のジーンズをはいていた。無理に飾っている感じも無く、雰囲気良く似合っていた。

ああ。 小春には、恋人ができたのか。

刹那はすぐに直感した。

楽しそうに男に話す小春。 優しい顔で 小春の話を聞いている男。 本当に幸せそうに見えた。

良かった。

小春は元気だった。 恋人もできて、幸せそうに日々を過ごしている。 本当に良かったじゃないか。

だが、気付くと男に呪い（のろい）の呪文を唱えようとしている自分がいた。

とっさに口を自分の手で覆った。 自分の鼓動がはっきりと聞こえた。

今、僕は何をしようとしていた？ 小春ちゃんの恋人を、殺そうと・・・・・・・・？

なんてことだ。 勝手な自分の都合で、人を殺めそうになった。自分が神であることも忘れて。 好きな人を奪われたくらいで。

いや、奪われたなどではない。

僕は、小春ちゃんに思いを伝えることもできなかった。 臆病者ではないか。

思いも伝えられないくせに、愛しい人を奪われたらこの様か。 なんて醜い神なんだろう。なんて最低な神様なんだろう。

神である以上、人間全てに平等でなくてはならない。個人個人を愛してはならないのだ。

もとより叶わない恋だった。割り切らなければならないことだ。 今までだって、ずっとそうやって割り切ってきたじゃないか・・・・・・・・。

そのとき、刹那の目から涙が一筋 零れ落ちた。

涙の雫は刹那のあごまで伝うと、下にいた小春の頬に落ちた。

「あれ、なんか水 落ちてきた・・・」

「ああ、昨日雨だったから、雫が葉っぱの上とかに残ってたんじゃないの？」

小春と男の会話は、刹那の耳には入らない。

涙が止まらない。 涙は次々と零れ、地面に落ちていく。届かない幸せを目の前にして、自分がどれほど彼女を思っていたかが、そして 悲しみにつぶされそうになるかを突きつけられる。

彼女への刹那の想いは、とても重すぎた。 これでは 彼女がつぶれてしまうだろう。可憐な花ほど、風や水に弱い。

小春ちゃんが幸せならば。 これで小春ちゃんが幸せになるならば。

この想いは胸の奥にしまって、彼女には振り返らずに歩んでもらうことを願おう。　せめても、彼女へがさまざまな困難を乗り越えて、幸せになれるように祈ろう。
もう伝えられない思いを、幸せという形にして彼女に送ろう。
彼女がくれた、花の数よりも　ずっと多い幸せを。

精一杯神様ぶろうとしても、心の底では男を恨んで、憎んでいる自分がいた。　実際に涙が少しも止まらない自分がいた。
心と体は　本当に正直者だ。

僕は　最低の神だ。

それから さらに数年が経った。

刹那の神としての力は、歳を重ねるに連れて弱くなっていった。昔は 日本中の桜を一気に咲かせられるぐらいの力を持っていたのだが、今ではひとつの木の芽を芽吹かせることで精一杯だ。

一日中、木の上でぼんやりとすることが多くなっていた。

「刹那様」

ここ周辺の木の精である 木霊が、力尽きたような刹那に話しかけた。

「ああ、木霊ちゃんか。久しぶり～。 1、2年ぶりだっけ？」

「いえ、あの……。 一週間前に会ったばかりです」

おどおどしながら答える木霊。手をもじもじと動かしている。

「え。あ、そうだっけ。ハハ、ごめんね、ヘンなこと言っちゃって～」

へらへらと笑って見せる刹那だが、顔は無理に笑っているのがバレバレだった。 そんな刹那を見て、木霊は悲しくなった。この人は、こんな調子で大丈夫なのだろうか。 こんな状態で、よく今まで精神が崩壊しなかったものだ。

「大丈夫ですか？ 顔色 悪いですよ」

「そう？そんなことないよ～。 僕は元気だよ。心配しないで」

また笑ってみせる。 引きつっている刹那の笑顔を見て、木霊のまゆ毛の下がり具合も比例するようにさがった。

「また 呪術の本読んでらっしゃるんですね」

木の根元に山のように置かれている本を見て、木霊は呟いた。

「まだ 忘れられないんですか。 小春さんのこと」

本のことを指摘されたところから 木霊のことを無視して本を読んでいた刹那だったが、ピクッと目が動いた。

「こんなことしても、小春さんが刹那様のことが見えるようになってならないことは、刹那様も分かってらっしゃるでしょう？」

「……………うん。そうだね。 小春ちゃんは、僕のことが見えるようにはならないよ」

あっさりとして刹那が認めたので、木霊は驚いた。 こんなにも執着している人が、取り戻せないことを認めた。 そっちのほうが心配するべきではないか、と 木霊は一瞬思ったほどだ。

「でもね。 簡単に諦められないんだよ。 たとえ小春ちゃんが僕を忘れていたとしてもね。 目の前にある知識の中に、自分の一生の願いが叶うヒントがあるなら 僕は人生をかけてそのヒントを見つける」

刹那の黒い瞳が、光の加減でなのか 深い青色に光ったのを 木霊は見逃さなかった。

「この際だから言っておきます。ひどいことかもしれませんが」

そういう前置きをしてから、木霊は口を開いた。

「小春さんと、その男の人。 ご結婚なさりますよ」

刹那の持っていた呪術書が、バサッと派手な音を立てて地面に落ちた。

「・・・・・・・・へ？」

間の抜けた返事をする刹那。 追い討ちをかけるように、木霊が言葉を続ける。

「ご結婚なさるんです、小春さん。 ここに近い教会で。 今は式の真っ最中ですよ」

刹那は木の上で固まっている。言葉も出ないようだ。 いつかは訪れるであろう結婚という存在に、刹那はある程度の覚悟をしているつもりだった。

そんなもので耐えられるほど、ショックは小さくなかった。

「見に行きませんか？結婚式。 小春さんの幸せを、見に行きましょう」

木霊は、ここまでいうのにかなり勇気を出した。

力が弱くなっているとは言えど、相手は神だ。一瞬で消されてしまうかもしれない。 それを覚悟で、木霊は刹那に伝えたかったのだ。

届かないものは届かなくていい。 周りを見たら、自分が恵まれていることを知らなければならぬ。神なんて、恐らく人はみんなあこがれるだろう。 そんな憧れの存在で、生物の息を超越した存在なのだから、強欲になってはならないということを伝えたかった。

強欲は、身を滅ぼすだけだということ。

「行けないよ」

木霊は、案の上の答えが帰ってきて はあ、とため息をつく。

刹那はさびしげな顔で言った。 目は木霊のほうを見ずに 遥か彼方を見ている。焦点が合っていない。

「そりゃ、最初は心配で 何回か見に行ったんだけどね。 小春ちゃん、幸せそうだったから。

今の小春ちゃんに、僕は必要じゃないからねえ」

言えない。

自分以外の奴と 幸せそうにしているあの子を見るのが辛い、なんて。

「じゃあ、これからも小春さんを忘れないんですね？」

「そうかもねえ・・・」

相変わらず気の無い返事をする刹那に、木霊は怒りでわなわたと震えた。

「もういいです！ 問答無用で 連れて行きます！！」

ほとんど引きずられて、結婚式場にやってきた。

今は食事をしている途中で、スピーチをしたり 余興をしたりして 賑やかだ。

前のステージには、新郎と新婦が座っている。 新郎はあのとときの男で、優しい目は変わってなかった。 新婦の小春は、とても美しかった。 真っ白なウエディングドレスに身を包んだ小春は、本当に幸せそうに笑っていた。余興を見て笑ったり、友達のスピーチを聞いて涙ぐんだりしている。

「やっぱり、小春ちゃんは人間だね」

木霊には聞こえないほど小さく、刹那は呟いた。

「へえ、意外！ 小春って、そういうの信じるんだ〜！」

小春の友達の声が聞こえてきた。うつむいていた刹那の視線が、ステージの小春のほうへと向く。

「うん。 実際にいるよ、神様」

マイクを通して、小春の声が会場に響いた。

「私が小さい頃から、ずっと見ていてくれてるんですよ。 私達には見えないだけで。それでも分かるんです。 人に話したら、絶対笑われるし 嫌われるかもしれないけど。 少なくとも、私がこうして幸せに暮らしているのも———」

少し間をおいて、小春が口を開いた。

「全部、神様のお陰なんです。 私、神様が大好きなんです」

小春が、笑顔を見せた。 刹那がずっと見てきた、懐かしい笑顔だった。

「せっ、刹那様・・・っ！ この神様って・・・もしかして・・・」

木霊が焦った顔で刹那を見上げた。

刹那は、呆けた顔をしていたが、ぽろぽろと目から涙をこぼした。

「ひどいなあ、小春ちゃん・・・！」

袖で顔を隠しながら、刹那は必死に声を押し殺しながらつぶやいた。

「もう叶いもしない恋を、忘れることも許してくれないのか・・・」

最近、泣くことが多くなった。 人間は歳をとると、一気に涙もろくなるそう。 少しでも、人間染みたところがあるということだろうか。

「ああ・・・。これで、やっと心の底から幸せを願うことができる」

そう呟くと、刹那は踵を返して 大きな結婚式場の扉を開いた。

突然扉が開いたので、客席はどよめいて、何人かの客人は立ち上がり スタッフは「こんな予定は無い」と慌てている。

「僕からの、結婚祝い」

そういうと、刹那は全力で力を使った。

あたりに咲いている桜に、力を送る。 3月だが、少し肌寒い。

桜の木の枝に、つぼみがついた。 かと思ったら、次々と花が開いていくではないか。

「なんだなんだ！？ 桜が咲いたぞ！」

客が外に出てくる。 あっという間に、結婚式場の庭園は人であふれた。

「どういうこと？ 蕾もなかったし、桜にはまだ季節が早いはずなのに・・・」

「不思議だが、それにしても・・・」

綺麗だなあ・・・。

誰もが、ため息混じりに呟いた。ちらちらと散っていく花びらを見て、式場から出てきた小春はあの日の景色を思い出した。

木の上で退屈そうにしていた神様。名前を忘れたといていたから、半分冗談で名前をつけてあげた。刹那と名づけてから、刹那の意味を知ったからかなり戸惑ったことも。いつも花を持っていったのは、嬉しそうに気から降りていろいろ話を聞いてくれた。楽しかったな。

そして、別れの日も桜だった。どこにもいない彼を探して、その日は家に帰ってもずっともやもやが取れなくて。原因は分かっていた。だから、諦めようと思って無理に大学で彼氏を作って、家のある町につれてきて、それを口実に不安で近寄れずにいた祠に立ち寄って。それでも、やっぱり刹那はいなかった。

いっそあそこで泣いてしまっても良かったのだけれど、もう忘れると決めたのだから、泣くこともしなかった。頬に落ちたあの水の正体も、彼の涙だと直感していた。

「刹那・・・・・・・・？」

彼女の目には見えていた。

向こうの景色が透けて見えているが、確かに彼だった。黒い髪。白い平安時代のような服装。自分のみに就けているベールのような薄絹。

名前を呼ばれて、ゆっくりと彼が振り向いた。

黒い瞳の目を細めて、彼は微笑んだ。彼が神であることを、改めて知った。

(久しぶり、小春ちゃん。綺麗になったね)

小春にだけ聞こえる声で、刹那が小春に語りかけた。

(ありがとう。君が幸せになってくれて、すごく嬉しいよ。初めてであったときの女の子とは、とても思えないくらいにね)

刹那は相変わらずの笑顔で小春に話している。

一方で、小春の目には涙が浮かんでいた。ずっと、会いたかった人が目の前にいる。やっと会えた。

(大丈夫、体が透けて見えるのは力を一気に出しすぎて存在が鮮明になっただけだから。それでも、そういうものが見える小春ちゃんに透けて見える程度だから、他の人には見えてないよ。大丈夫、死ぬわけじゃないから)

「ごめん、刹那。私・・・・・・・・、刹那のこと・・・・・・・・」

なにかを呟く新婦に、周りのものが不思議そうに見ている。

(うん。僕もね、小春ちゃんのこと大好きだったんだよ)

初めて知った刹那の思いに、小春ははっと目を見張る。

(ずっと、大好きだった。何度も思いを伝えようとした。小春ちゃんが新郎さんを連れてきたときは、正直かなり嫉妬したよ。でもね、さっき気付いたばかりなんだけど、人を愛するってことは「その人を自分のものにする」ことじゃなくて「その人の幸せを願うこと」だってね)

たんたんとそんなことを語る刹那に、小春は涙を堪えられなくなった。

(だから、願うよ。小春ちゃんだけでなく、君の周りにいる人たちも、みんなが幸せになれる

ように)

だんだんと刹那の体が消えていくのを、小春は見えていられなかった。ただただ、涙だけが零れていく。

(多くの子等に 幸多からんことを)

そういうと、刹那の体は完全に消えてしまった。すうっ、と溶け込むような消え方だった。

「あなたのこれからにも 幸多からんことを」

涙を流しながらも、小春はもう見えない刹那にそう答えた。

「私の周りの人」には、あなたもちゃんと入っているのよ。

結婚式場に、美しい桜が咲き乱れている。